

日本中國學會報 第74集 抜刷
2022年10月8日 発行

学界展望 (哲学)

吾妻 重二
橋本 昭典
高橋あやの
井澤 耕一
佐藤 実
二階堂善弘

学 界 展 望

● 哲 学

はじめに

今回の「学界展望」哲学部門は関西大学が中心となって担当した。2021年に日本国内で刊行された単行本（訳書を含む）を中心に展望する。方針としては、書評というより紹介に重点を置いた。これは紙幅の制限もあるが、書評するには当該テーマに関する専門知識と先行研究の十分な把握が必要だからであって、しかるべき能力と時間を要する。よってここでは紹介と簡単なコメントを付するにとどめ、なるべく多くの情報を提示することを心がけた。

各項目の執筆者は次のとおりである。

- はじめに・総記： 吾妻重二（関西大学）
- 古代（先秦～漢）： 橋本昭典（奈良教育大学）
- 中世（三国～唐）： 高橋あやの（大東文化大学）
- 近世（宋～清）： 井澤耕一（茨城大学、宋元）、佐藤実（大妻女子大学、明清）
- 近代： 井澤耕一（茨城大学）
- 仏教・道教・民間信仰： 二階堂善弘（関西大学）
- 日本・朝鮮漢学など： 吾妻重二（関西大学）

このうち「仏教・道教・民間信仰」は今回新たに設けたものである。それはこの分野が研究領域として特化した面をもつからで、各時代に分散させるよりもひとくくりにした方が紹介しやすいためである。本展望における分類があくまでも便宜的なものであることを諒とせられたい。

各分野の原稿は吾妻がとりまとめたのち、本学会出版委員会での検討を経て全体を調整した。

一、総記

まず、総合的な論文集として伊東貴之編『東アジアの王権と秩序—思想・宗教・儀礼を中心として』（汲古書院）がある。2016年度から4年間、伊東氏が国際日本文化研究センターにおいて主宰した共同研究会の成果で、900頁を越える大冊である。東アジアの比較思想的アプローチが斬新な印象を与える。特別寄稿を巻頭に、「〔中華帝国〕の形成と確立—古代・中世の中国」、「〔日本〕の成立と展開—古代・中世の日本」、「〔東アジア〕の「近世」—中国の場合」、「〔東アジア〕の「近世」—日本と朝鮮・韓国」、「〔近代〕の胎動とダイナミズム」の5部構成、計55篇の論考からなり、古代から近代まで、中国や日本、朝鮮を含む思想史の諸分野をカバーする注目すべき論集といえる。

田中正樹編『中国古典学の再構築』（汲古書院）は、2017年度から3年間にわたって行われた二松学舎大学東アジア学術総合研究所・共同研究プログラムの成果論文集であ

る。「『春秋左氏伝』と現代の中国学」、「南宋の士大夫・洪邁の学術」、「二一世紀に於ける『孟子』像の新展開—中国古典学と孟子」の3部構成、計8篇の論考からなり、各分野における中国古典学の新たな息吹を提示しようとする。

東アジアの文化交流に関しては「東アジア文化講座」全4巻（文学通信）が刊行された。このうち哲学・思想関係では金文京編『漢字を使った文化はどう広がっていたのか：東アジアの漢字漢文文化圏』（同講座2）、ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観：東アジアの環境と風俗』（同講座4）があり、前者は44名、後者は34名の執筆者による論集である。中国の文化を東アジアの視点からとらえ直そうとする視点が重要と思われる。

加藤泰史・小倉紀蔵・小島毅編『東アジアの尊厳概念』（法政大学出版社）は、欧米圏の尊厳理解を「普遍的」と見なし、非欧米圏が一方的にそれを受容してきたという図式に対して、「日本・中国・韓国を中心に、東アジアから見直す」ことを企図した意欲的論集である。中国哲学関係では林羅山（武田祐樹）、牟宗三（小島毅）、儒教・中国の伝統における尊厳概念（倪培民、ステイブン・C・アングル、王小偉、李亜明）、朝鮮（韓国）の尊厳概念（小倉紀蔵、片岡龍、金光来ら）などが取り上げられ、東西の伝統と人間観の相互理解に示唆を与えてくれる。

方法論を含む中国学・東洋学関係の著書としては、町泉寿郎編『レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学—旧蔵漢籍の目録と研究』（汲古書院）が注目される。二松学舎大学で推進されている日本漢学研究の一成果で、フランス・リール市立図書館に所蔵されるフランスの東洋学者レオン・ド・ロニー（1837-1914）の旧蔵書をとりあげ、漢籍全体の目録（欧文・和文2種）と関連論考6篇を収録する。本書は同大学の刊行する「日本漢学研究叢刊」の第1集であって、続編が期待される。

中国学に関連しては陶徳民『もう一つの内藤湖南像—関西大学内藤文庫探索二十年』（関西大学出版部）があり、陶氏が長年研究してきた内藤湖南とそのコレクションに関する論考を集成している。内藤湖南に関しては于伝鋒『中国からみた内藤湖南思想研究』（風詠社）も刊行された。同書には「中国における内藤湖南研究の動向」の一章もあり、シノロジスト湖南の歴史観や文化史解釈については中国においても再評価の機運が高まっているようである。

中国思想の基本にかかわる著作としては吉川忠夫『三余統録』（法藏館）があり、著者が長年にわたって『中外日報』社説に寄せてきた文章の中から72篇を選録している。中国史が中心だが、思想や宗教、典籍に関する掌篇も貴重である。漢字にまつわる研究では鹿島英一『東アジア文字の情報理論』（風間書房）が、「旧漢字圏（台湾と韓国）」、「擬似漢字（西夏文字、契丹小字）」、「雲貴高原の絵文字群」、「世界の文字（音標文字の類型）」の分類を立て、定量的データを用いて漢字その他東アジアの文字体系の特徴に迫ろうとしている。岡田英弘『漢字とは何か—日本とモンゴルから見る』（藤原書店）はその著作集全8巻（2013-2016）から漢字に関するエッセイを抜き出して一書にしたもの。モンゴル史を専門とする立場から独自の漢字論を展開している。このほか国家図書館中国記憶プロジェクトセンター編著『中国の文字世界』（水野衛子訳、ゆまに書房、

漢字文化研究叢書1)が漢字文化全般について概説している。

情報関係では漢字文献情報処理研究会編『デジタル時代の中国学レファレンスマニュアル』(好文出版)が、中国学に関する情報の調べ方をデジタル関係を中心に述べている。漢字、歴史、仏典・道教経典、人物、制度、社会、文学、芸術、中国語、音韻、論文などをどのように調べたらいいのか、その最新の手法を丁寧に紹介していて有用である。

個人の著作集としては『山田慶児著作集』(臨川書店)が刊行開始された。科学史家の立場から中国の自然科学・思想史全般に業績を残した山田氏の著作集として重要であり、2021年には第1巻「自然哲学I」、第3巻「天文暦学・宇宙論」、第6巻「科学論(近世篇)」が配本された。

全般にかかわる書物として復刊・改訂版の出版も多い。葛兆光『完本 中国再考—領域・民族・文化』(辻康吾監訳、永田小絵訳、岩波書店)は2014年に刊行されて好評を博した『中国再考』(岩波現代文庫)の増補改訂版である。また本田濟『易学：成立と展開』(講談社学術文庫)、末木剛博『東洋の合理思想』(法蔵館文庫)はいずれも絶版だった名著の復刊である。これらは時を超えてなお色褪せない古典の名著というべきもので、若手研究者には特に読んでいただきたいところである。このほか武田時昌編『天と地の科学 東と西の出会い』(臨川書店)、『術数学の射程 東アジア世界の「知」の伝統』(同)も改訂のうえ再版された。(吾妻重二)

二、古代(先秦～漢)

まず、史学を主とするなかで哲学に及ぶものを取り上げる。岡村秀典『東アジア古代の車社会史』(臨川書店)は、同氏の編により出版された林巳奈夫『中国古代車馬研究』(臨川書店、2018)をその後の出土考古資料についての調査・研究を踏まえつつ継承・発展させたもので、文献における車の記述理解には参照が必須の書と言える。たとえば『詩経』六月の詩篇は、本書の馬の分析や「多友」鼎の銘文読解を待ってこそ真相に迫れる。本書は「多友」鼎の銘文解釈について笠川直樹の説を参照するが、その積文を収める『漢字学研究』(立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所)は毎号、金文の詳細な訳注を發表しており参考になる。

佐藤信弥『戦争の中国古代史』(講談社現代新書)は、岡村書も触れる戦車戦を含め、殷周から秦漢までの戦争を最新の研究成果を広く見通したうえで多方面から解き明かし、随所に啓発的な見解を提出している。鶴間和幸『始皇帝の地下宮殿』(山川出版社)は多数の図版を掲載し、考古資料からの考察を展開する。孫慶偉『春秋時代の社会と文化—優美と洗練の時代』(宮島和大訳、科学出版社東京)は毎ページに関連図版を載せ、春秋時代の実像をリアルに伝える。著者は北京大学考古文博学院教授。原著『最雅的中国—春秋時代的社会与文化』(科学出版社、2015年)のタイトルは錢穆『国史大綱』の趣旨にもとづく。

岩波講座『世界歴史』5巻(岩波書店)は「中華世界の盛衰」と題され、主として華夷概念をめぐる論考が並ぶが、高村武幸「漢代地方官吏の日常生活」は、出土「名詔」

から地方における交友関係、党派の形成に迫る。奇しくも、宮宅潔『ある地方官吏の生涯：木簡が語る中国古代人の日常生活』（臨川書店）、柿沼陽平『古代中国の24時間：秦漢時代の衣食住から性愛まで』（中公新書）という類書が同年に公刊された。これらの成果から、地域性を帯びた出土資料が、伝世文献が記すことのなかった地方の実情、「普通」の人たちの生活実態を明るみに出すことが知られる。新発見資料と対峙する時、従前の研究に照らすことが必須であるのは言うまでもない。その点で、志学社の「名著再誕」シリーズはたいへんありがたい。本年は靑山明『増補新版 漢帝国と辺境社会』（志学社）が復刊された。

他方、地域の時間的に限定される出土資料をどう全体史につなげていくかの問題も生じる。佐藤達郎『漢六朝時代の制度と文化・社会』（京都大学学術出版会）はこの問題に取り組む。後漢に出現する職官儀注書の源流、六朝期に発展をとげる制度、それら制度のもとでの社会、文化について詳細に論じられる。揚雄、崔駰、崔瑗、胡広の官箴の訳注が付される。

石井真美子・村田進・山内貴『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕論政論兵之類 譯注』（朋友書店）は、1972年に発見され2010年になってようやく公刊された佚書50篇の訳注である。湯浅邦弘『竹簡学』（大阪大学出版会、2014）等によって論じられてきたが、本訳注の完成により一層の研究の深化が期待される。

中国哲学の専著として、安本博『中国古代思想研究』（文芸社）がある。1968年以来近年まで、『論語』を中心とする著者歴年の論文集である。「孔子世家」など孔子伝承を考察した論考も収めるが、その「孔子世家」については、吉本道雅が歴史文献に照らして詳細な考証を行う「孔子世家疏證」（『京都大学文学部研究紀要』60号）を発表している。蜂屋邦夫『老子探求』（岩波書店）は、人物像の歴史的展開、書物の成立、思想・解釈の三方面から、北大簡「老子」など最新の研究成果をも踏まえて明らかにされる著者の「老子探求の到達点」。

渡邊義浩『『論語』の形成と古注の展開』（汲古書院）は、著者年来の観点である「古典中国」を軸とし、津田左右吉、武内義雄を議論の前提として、『論語』書と注釈史の実相に迫る。前漢の「斉論」の分析は、2016年に海昏侯劉賀墓から出土した竹簡『論語』の今後の研究の進展とあわせて注目される。同『論語 孔子の言葉はいかにつくられたか』（講談社選書メチエ）は、複雑な系統をもつ『論語』諸本の盛衰、『論語』の経学的・史的解釈について、系譜図を掲載するなど平易な語りに努める。巻末に、本書に引く本文の「集解」による解釈を付すが、その『論語集解』上・下（早稲田大学出版部）の全訳文庫本も刊行されている。さらに同氏の『中国における正史の形成と儒教』（早稲田大学出版部）は、「古典中国」を指標に、『史記』『漢書』という二種の史書の比較を起点として、宋代に至るまでのさまざまなタイプの史書を検討することで、「正史」「正統」といった歴史意識を追究する。

『論語』に関しては西村天因『論語集釈』が影印刊行された（大阪大学大学院文学研究科・湯浅邦弘編）。近年の調査により天因の故郷種子島で発見された新資料として貴重である。

中国語書になるが、佐藤将之『後周魯時代的天下秩序 『荀子』和『呂氏春秋』政治哲学之比較研究』（台大出版中心）は、著者の荀子を中心とする戦国諸子研究を基盤に、前256～前221の35年間を「後周魯」時代とし、その天下秩序を背景として見た『荀子』『呂氏春秋』両書の思想的本質を考察している。（橋本昭典）

三、中世（三国～唐）

古勝隆一『中国中古の学術と社会』（法蔵館）は、氏の前著『中国中古の学術』（研文出版、2006）の問題意識や方法を継承し、さらに深化させて中古の学術の様相を分析したものである。上篇「儒道注釈と学術史」には注釈と目録学の観点で中古学術史を論じる論考（全6章）が収録されるが、なかでも学術の地域性を重視する点が注目される。下篇「儒仏道と中古社会」には、儒仏道三教と中古の社会との関係を考察する論考（全7章）が収録され、特に国家権力との関わりについて多方面から窺うことができる。なお、古勝氏は中国・社会科学文献出版社より『漢唐注疏寫本研究』も刊行している。

関剣平『中国古代茶文化史』（思文閣出版）は、中国茶文化が成立した魏晋南北朝時代を中心に、科学技術史や文化人類学などの視座を用いて、本草学や道教との関わりからみた茶文化の起源、階層・地理からみた茶文化の広がり、茶宴や茶器、賦などからみた喫茶の風習について論じる。図像も多く取り上げ、これまで限定的であった茶文化研究に正面から取り組む労作である。

中村裕一『荊楚歳時記新考』（汲古書院）は、氏のこれまでの『荊楚歳時記』研究を発展させ、これまでしばしば混同されてきた『荊楚歳時記』と『荊楚記』の実体を考究し、著者や成立時期に関する通説に訂正を迫る。現行本と、諸文献に引用される『荊楚歳時記』『荊楚記』の逸文とを綿密に比較・検証した氏ならではの手法である。

特定の立場に焦点を当てた著作として、大澤正昭『妻と娘の唐宋時代』（東方選書55、東方書店）、千田豊『唐代の皇太子制度』（京都大学学術出版会）がある。いずれも歴史学の観点から書かれたものだが、思想史的にも重要である。前者は唐宋時代に焦点を当てた女性史で、同氏の『唐宋時代の家族・婚姻・女性』（明石書店、2005）をベースとして入門書としたものである。判決文集、家訓、小説など扱う史料が特殊であり、それらを用いて女性の生業や再婚、財産権などの日常生活を明らかにする。本書については「WEB 東方」に、板橋暁子による書評が載る（2022年5月16日投稿）。後者は、博士学位論文を加筆・修正したものである。西晋から唐代に至る皇太子像の変化・位置づけについて、太子師傅の急増、積奠、皇太子号の追贈といった皇太子にまつわる諸種の事象をめぐって詳細に検討、解明している。

森三樹三郎『梁の武帝：仏教王朝の悲劇』（法蔵館文庫）は、1956年の平楽寺書店版の同書を復刊し巻末に船山徹の解説を加えたものである。解説には内容の概略と特徴、本書刊行後の主な研究の紹介がある。

訳注もいくつか刊行された。まず、石見清裕による『貞観政要全訳注』（講談社学術文庫）は各篇の冒頭に解説、章ごとに現代語訳と原文を載せる。全訳である点、歴史家の立場で訳されている点が大きな特徴である。訳は平易でわかりやすく、「はじめに」

や解説部分で時代背景、唐の官制や事件などにも触れられていて、内容を理解する上で役にたつ。渡邊義浩主編『全譯三國志』（汲古書院）は第一冊『魏書』（一）が第六冊『蜀書』（2019）に引き続き刊行された。

野間文史訳注『周易正義訓讀』（明德出版社）は、孔穎達により撰定された『周易正義』を訓読したものである。本文・注・疏すべてに原文・校勘・訓読を施す。『春秋左伝正義訳注』全6冊に続いての刊行で、『東洋古典学研究』に2009年から連載した訳注を基礎としている。『周易』の訳注としてのみならず、『正義』の研究、唐代の周易解釈について理解するためにも大いに役だつ。

大東文化大学東洋研究所『藝文類聚』研究班（代表：田中良明）による『藝文類聚』（巻四十九）訓讀付索引（大東文化大学東洋研究所）は、『藝文類聚』を毎年一巻分ずつ訓読するものである。2021年は巻49職官部が刊行された。氣賀澤保規監修、池田恭哉ほか訳『中国史書入門 現代語訳 北齊書』（勉誠出版）は、『隋書』に続く「中国史書入門」の2冊目となる。

その他、慶應義塾大学論語疏研究会編『慶應義塾図書館蔵 論語疏巻六 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 論語義疏 影印と解題研究』（勉誠出版）は、2017年に再発見された慶應義塾図書館蔵『論語疏』巻六と、斯道文庫蔵『論語義疏』（文明19年書写大槻本）をフルカラー原寸大で影印、解題、伝本紹介等を加えた大型本である。

（高橋あやの）

四、近世（宋～清）

宋元に関しては、まず朱子学関係の著作として以下のものが挙げられる。一般書として、垣内景子『朱子学のおもてなし—より豊かな東洋哲学の世界へ』（ミネルヴァ書房）が、前著『朱子学入門』（ミネルヴァ書房、2015）の続編として刊行された。本書では仁・義・礼・知・信・忠・孝を朱子学の大広間、心・性・経を奥座敷と見做して、それぞれを平易な言葉で解説している。著者は従前より朱子学の核心を「心」の問題と主張しており、それを踏まえて読み解く必要がある。次に松野敏之『朱熹『小学』研究』（汲古書院）は、現行の『小学』を劉清之の著作とせず、朱熹自身が劉氏の草稿を大幅に修訂・改訂したものと主張する。併せて『小学』に通底する「孝」「敬」に対する朱熹の見解を詳細に考察し、さらに元明清時代の『小学』の受容について、明代にいったん衰退するものの、清代に至って再び盛行したと指摘している。

吾妻重二『愛敬与儀章：東亞視域中的《朱子家礼》』（呉震等訳、上海古籍出版社）はその『朱子家礼』に関する諸論考を集めたものである。著者は2020年、『朱子家礼 宋本彙考』（上海古籍出版社）を公刊しており、本論考はその「研究篇」と見てよいだろう。著者は、第九章「《家礼》与日本—日本近世的儒教喪祭礼儀」において、江戸期における儒教喪祭礼儀に関する著述やその実践を挙げて、儒教儀礼が近世日本社会に影響を与えていたと説く。この提言は江戸思想史研究の分野においてもさらに検討される必要があるだろう。

次に朱子学以外の著作について、劉子健の名著『欧陽脩：11世紀のユマニスト』（原

著は1967年刊、小林義廣訳）が初めて邦訳されたのが注意される。ただし原著の副題中の「Neo-Confucianist」をユマニスト（人文主義者）と訳したことにはいささか疑問が残る。

櫻井智美他編『元朝の歴史—モンゴル帝国期の東ユーラシア』（勉誠出版）所収の宮紀子「知の混一と出版事業」が、モンゴル朝廷が古今東西の英知の集積と普及に熱心で、多言語世界の中で「知」の絵図化が急速に進んだと指摘するのは示唆に富む。また板倉聖哲編『アジア仏教美術論集 東アジアⅢ 五代・北宋・遼・西夏』（中央公論美術出版）所収の鄧菲「図像における重層的寓意—宋金代の墓葬中の孝子故事図」は、宋代墓に描かれた「孝子図」には儒仏道三教の孝親観の融合と漢代への復古が見られると指摘する。こうした新たな見解は今後、宋元思想史研究の新たな展開を図るうえで注目すべきことと思われる。（井澤耕一）

明清に関しては、まず湯浅邦弘編『儒教の名句—『四書句辨』を読み解く』（汲古書院）の下巻が刊行され、2020年に出た上巻とあわせて完結した。四書の巻末に「四書句辨」と題して重要句を附録する書が刊刻されるようになり、日本にも伝わるが、その「四書句辨」を18世紀大坂の中井竹山が単行本化して刊刻した『四書句辨』の訳注と解説である。下巻には湯浅氏による「四書句辨」の学術的意義や『四書句辨』の成立についての論考をはじめとする解説がつく。

河南開封にあったユダヤ人街に光をあてる小岸昭『中国・開封のユダヤ人 増補版』（人文書院）は増補版とあるように、2007年に出版された同書に開封ユダヤ人情報を西に伝えたマテオ・リッチに関する論考を追加したもの。

明清期を対象とする歴史学の研究成果も思想史を語る上で重要であることは疑いない。岸本美緒『明末清初中国と東アジア近世』（岩波書店）は明清史を専門とする著者の論文集。フランス啓蒙思想家ヴォルテールの寛容論を契機として清朝の徳治の意味を検討した章や、「中国」と「外夷」「夷狄」概念を『明実録』『清実録』などから定量的に検討した章など思想研究に刺激を与える。

またこの時代の歴史学研究では、広く東アジアを俯瞰する研究が充実している。アジア遊学シリーズ、小二田章・高井康典行・吉野正史編『書物のなかの近世国家 東アジア「一統志」の時代』（勉誠出版）は元、明、清に編纂された「一統志」から東アジアを見つめなおそうとする。道教と地誌との関わりについてのコラムなどもある。また大田由紀夫『銭躍る東シナ海 貨幣と贅沢の一五～一六世紀』（講談社選書メチエ）は貨幣の流通から中国大陸、朝鮮半島、日本、琉球のつながりを解き明かす。

東アジアの交渉史研究としては以下の2著がある。まず程永超『華夷変態の東アジア近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究』（清文堂出版）は江戸時代の日朝関係史研究に中国という視座を入れ、近世の日本、朝鮮、中国の関係の再構成を目指す意欲作で、通信使や燕行使といった使節の行動を中心に議論が進められる。鈴木開『明清交替と朝鮮外交』（刀水書房）は17世紀における朝鮮と清（後金）との関係を、基礎資料の丁寧な分析にもとづいて明らかにする。鄭忠信の後金派遣を検討することで、これまで無批判に継承されてきた先行研究に批判を加え、その上で丁卯の乱、丙子の乱における朝鮮

と清（後金）との外交について検討している。

（佐藤 実）

五、近代

まず幕末から明治期までの日本と、清末から現代に至る中国において、そこに生きた人々の思想を分析した論文集として、楊際開・伊東貴之編著『「明治日本と革命中国」の思想史—近代東アジアにおける「知」とナショナリズムの相互還流』（ミネルヴァ書房）がある。本著は国際日本文化研究センター 2018 年度共同研究の成果をまとめたもので、その中で中国をテーマとするものとしては、梁啓超、劉師培、章炳麟、汪精衛、文革に関する諸論がある。

次に梁啓超研究者として著名な狭間直樹が近年の論考を輯めて『近代東アジア文明圏の啓蒙家たち』（京都大学学術出版会）を刊行した。第Ⅰ部「近代東アジア文明圏形成史」では西周、中江兆民、小学校科目としての「万国公報」、福沢諭吉、内藤虎次郎など、明治期の日本における種々の思想形成について論じられている。第Ⅱ部「文明圏の功労者 梁啓超」では、梁自身の著作および梁啓超研究史に関する諸論が収められている。

岩崎育夫『近代アジアの啓蒙思想家』（講談社選書メチエ）は「ヨーロッパに生まれた“啓蒙思想”は、アジア各地の知識人にどんな衝撃を与えたのか」という問題意識から日本の福沢諭吉、中国の陳独秀と胡適、インドのネルーとガンディー、朝鮮の朴泳孝、ベトナムのファン・ボイ・チャウらを取り上げる。このような「アジア」という視点は中国を理解するうえでも重要であろう。

近代政治思想史に関して、1991 年版の復刊であるが、経世思想を基に清朝の政治思想を考察した大谷敏夫『清代政治思想史研究』（汲古書院）も再読すべき名著といえよう。

教育に関する著作としては、稲森雅子『開戦前夜の日中学術交流—民国北京の大学人と日本人留学生』（九州大学出版会）および朱鵬『中国近代教育の成立—清末民初の「新学」の解明』（松籟社）がある。稲森書は 1930 年代の北京と日本を舞台に展開した、目加田誠、白話文学研究者馬廉、日本古典文学翻訳者銭稲孫たちの事績を考証したものである。特に第一章は 2019 年刊行の『目加田誠「北平日記」—1930 年代北京における日中学術交流』（中国書店）を用いた好論といえよう。朱鵬書は氏の遺稿集として出版されたもので、表層的な論考も見られるが、第七章で考証されている「学政」についての論文は清代教育制度を理解するうえで有益である。

最後に、社会、文化についての著作をいくつか挙げてみる。山本英史『郷役と溺女—近代中国郷村管理史研究』（汲古書院）は、20 世紀前半の中国東南部における郷村社会の管理について、それを担った「郷役」と女兒を主とする嬰兒殺し、いわゆる「溺女」を口述記録も用いて考察している。黄興濤著・孫鹿訳『「她（かのじょ）」という字の文化史—中国語女性代名詞の誕生』（同上）は、「她」という女性代名詞の誕生から社会への浸透の経緯を明らかにし、これを「文化史的出来事」に属するものとして論じている。

内田慶市編著『「造洋飯書」の研究：解題と影印』（関西大学出版部）は、西洋料理が

中国にいかに関係したかを考察するツールとして有用であり、今後明治日本など近代アジア諸国における西洋料理の普及と合わせて検証すべきであろう。また岩間一弘『中国料理の世界史—美食のナショナリズムをこえて』（慶應義塾大学出版会）は、中国料理が近代以降、今日のように形成された歴史、そして世界各国の料理の一部となった歴史を考証している。これらの諸論は思想史研究の新たな展開を考える上で大いに参考になる。（井澤耕一）

六、仏教・道教・民間信仰

まず意欲的な作として、吉田一彦編『神仏融合の東アジア史』（名古屋大学出版会）を取りあげたい。これまで「神仏習合は日本独自の宗教現象である」と見なされてきた。しかし、たとえば中国の寺院に行けば、必ず、関帝が伽藍神として祀られているのを見るであろう。つまり神仏習合は、アジア各地で当たり前のように行われている現象である。本書では16名の研究者が、それぞれの意識で神仏「融合」現象を分析している。前半ではアジアの各地に見られる神仏融合の事例について紹介し、後半では日本での歴史的な例を挙げながら、日本の特異な神仏習合観がどのように形成されてきたかについて論じている。

意欲的ということでは、孫昌武『禅についての十五章』（衣川賢次訳、東方書店）も興味深い。「禅は仏教ではない？」という問いかけから始めて、これまでの研究を批判的に追う。中国禅の流れを概説的に追うことが中心であるものの、鋭い問題意識を感じざる著作である。

関連して、伊吹敦『中国禅思想史』（禅文化研究所）も注目すべき著作である。大部の書であり、近代までの禅思想を丹念に追うものである。これまでの研究では、北宗や南宗などの禅宗の系譜について無批判に受け入れていたものが多かった。著者は禅宗の系譜の作為的な面について批判し、様々な観点から問題を提起している。

齋藤智寛『中国禅宗史書の研究』（臨川書店、2020）は『楞伽師資記』から『景德伝燈録』に至る唐宋期の燈史六種につき分析するとともに、敦煌文書や高麗古版本も用いて禅宗教団の形成と実践を論じる。宗派的偏向にとらわれずに実証的考察を行ったすぐれた成果といえる。

百橋明穂・田林啓編『神異僧と美術伝播』（中央公論美術出版）は、日中の研究者による9篇の論考から成る論集となっている。仏教美術に関連して、怪異や奇跡などを行う神異僧に焦点を当てて論じているのは、非常に新しい視点であると考えている。特に、劉薩河の特異性について論じられたことは、注目すべき点だと考える。

李乃琦『一切経音義古写本の研究』（汲古書院）は、データベースを活用した研究であり、その点で画期的なものである。『一切経音義』はむしろ日本の方に多くの写本が残っており、これと中国の刊本との比較を行う。諸本の系統など、これまでの多くの疑問点を明らかにしている。

六度集経研究会訳『全訳 六度集経—一仏の前世物語』（法蔵館）は呉の康僧会訳『六度集経』全巻を初めて現代日本語に訳し、注を施したもの。名古屋大学における研究

ループ（代表：神塚淑子）の成果で、類似の話を載せるインド・中国・日本の文献の対照一覧表を附すなど、たいへん実証的な内容となっている。

ちくま学芸文庫からはエルネスト・アイテル著、中野美代子・中島健訳『風水—中国哲学のランドスケープ』（筑摩書房）が出版された。19世紀の西洋人である著者が風水に対して体系的に解説したもので、いま読んでも示唆に富むことのある古典的著作である。

2020年から2021年にかけて出版されている『新陰陽道叢書』（名著出版）も注目すべき著作だと考える。第1巻の細井浩志編『古代』は2020年に出版され、第2巻の赤澤春彦編『中世』、第3巻の梅田千尋編『近世』、第4巻の小池淳一編『民族・説話』、第5巻の林淳編『特論』が2021年に刊行されたものである。1990年代に出版された『陰陽道叢書』（名著出版）から30年を経て、新しい知見を豊富に盛りこんだものとなっている。

東アジア怪異学会編『怪異学講義—王権・信仰・いとなみ』（勉誠出版）は、怪異学の入門書であるが、非常に豊富な内容を有するものである。中国研究を専門とする研究者の執筆も多く、読みごたえがある。

武内房司編『中国近代の民衆宗教と東南アジア』（研文出版）は、民間宗教研究において重要と思われる著作である。中国系の民間宗教の多くは、むしろ東南アジア諸国で発展を遂げている。ただ、その実態に関する研究はあまり多くない。そもそも、ベトナムにおけるカオダイ教などの状況についても知られてはいない。そういった点からも、本書は貴重なものである。

大形徹『不老不死—仙人の誕生と神仙術』（志学社）は、入門書の形を取るが、中身はそれに留まらないものである。この書は、1992年に講談社現代新書から出されていたものの改訂版となる。吉川忠夫・麥谷邦夫編『真話』上・下巻（臨川書店）も、六朝道教研究における重要な著作であり、2000年に刊行された『真話研究（譯注篇）』（京都大学人文科学研究所）を改訂して出版されたものである。

大まかな動向としては、いずれの研究も中国一国を扱うものではなく、日本を含む東アジア、それに東南アジアの中華圏などに視野を広げた研究が多くなってきている。今後その傾向は強まっていくものと考えられる。（二階堂善弘）

七、日本・朝鮮漢学など

日本を中心に中国・朝鮮など東アジア諸国との関係性を論じる著作も多い。俯瞰的著作として、まず村井章介『東アジアのなかの日本文化』（北海道大学出版会）を挙げたい。2005年に刊行された同名の放送大学テキストの増補改訂版で、「日本文化は東アジアの交流を母体として生み出されてきた」という視点から日本と中国、朝鮮の古代から近世に至る文化の諸交渉を重厚な研究蓄積をふまえて論じており、思想研究の面でも示唆に富む。

上島享・吉田一彦編『日本宗教史』第2巻（吉川弘文館）は「日本宗教史」全6巻のうち「世界のなかの日本宗教」と題する一冊で、船山徹「仏典の伝播と日本の経蔵」、

森部豊「隋・唐帝国と「宗教」、荒見泰史「敦煌仏教の展開と日本」、吾妻重二「儒教と日本の葬祭儀礼」、二階堂善弘「アジアと日本の神仏信仰」など最新の関連成果を含む。また日本思想史学会創立50周年記念の論集として編まれた前田勉・苅部直編『日本思想史の現在と未来』（ペリかん社）では田世民「漢籍の訓読から儒教儀礼へ―舶載された知の受容と多様な思想展開」が日本儒教史研究の一視点を示している。

木下武司『続和漢古典植物名精解』（和泉書院）は2017年『和漢古典植物名精解』の続編で、日本と中国の典籍に登場する植物名を文献学・自然科学の両面から解明した労作。著者は同書により第9回日本学賞を受賞している。

次に、時代を逐って関連著作を紹介すると、日本中世については川本慎自『中世禅宗の儒学学習と科学知識』（思文閣出版）があり、禅僧たちの経営手腕や知識・技術につき考察する。儒学や漢詩文のみならず、数学や医学分野についても分析している点が新しい。康昊『中世の禅宗と日元交流』（吉川弘文館）は14世紀の虎関師錬を中心に、五山禅林の思想・教学、仏事法会と中国宋元仏教との関係を幅広く論じている。中世禅林の学問については近年、日中交渉の視点による新たな成果が多く生み出されており、これらもそうした流れの一翼を担うものである。

日本近世に関しては、辻本雅史『江戸の学びと思想家たち』（岩波新書）が、漢学を含む教育・学習に重点を置いた思想通史として有益である。西岡和彦・石本道明・青木洋司『江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究』（明德出版社）は、『論語』を平易に解説した訓蒙書に関する書誌的考察である。これらの訓蒙書は従来、通俗書として哲学研究からは軽視されがちであったが、その数は刊本・写本を含めてきわめて多く、日本儒学史・漢学史解明の上でも再評価されるべきであろう。

殷曉星『近世日本の民衆教化と明清聖諭』（ペリかん社）は中国の明・清皇帝による勅諭「明清聖諭」の江戸期および明治期日本における受容と変容を扱い、日本儒教を新たに照射する内容をもっている。ヴィグル・マティアス編『近世・近代期筆談記録が語る東アジアの医学・学術交流』（汲古書院）は2018年、浙江大学と二松学舎大学が共催した国際シンポジウムにもとづく論文集で、第一部に日本、中国、韓国、台湾、フランスの研究者による7篇の論考を載せ、第二部に『朝鮮人筆談』など筆談資料の翻刻と解説を載せる。筆談資料という新たな資料の発掘と、近世・近代の東アジアにおける文化交流という視点の広さが注目される。

磯部彰『葉の都富山の漢籍と漢学―藩校広徳館とその蔵書』（汲古書院）は富山藩校の広徳館をめぐる詳細な研究で、その成立や組織、教育、出版、漢学、蔵書などを実証的に解明する。江戸時代における藩校や私塾については、資料の発掘その他、なお開拓の余地があるようで、今後も本書のような個別研究を積み重ねていく必要があると感じられる。

吾妻重二『家礼文献集成 日本篇9』（関西大学出版部）は同シリーズの第9冊で、『家礼師説』など浅見綱斎の関連著述を影印・翻字し、詳細な解説を附している。これに関連して、坂詰秀一監修・松原典明編『墓からみた近世社会』（雄山閣、近世大名墓の新視点1）が三浦梅園、岡藩圓福寺などにおける儒教式墓制につき調査報告している。

日本における儒教実践としては思想や教育のみならず、こうした礼制についても考慮すべきことは言うまでもないであろう。

山本嘉孝『詩文と経世 幕府儒臣の十八世紀』（名古屋大学出版会）は室鳩巢、新井白石、中村蘭林、柴野栗山、林鶴梁ら幕府儒臣に焦点を当て、その漢詩文と政治との結びつきにつき考察する。吾妻重二編著『「南岳百年祭」記念論文集』（関西大学出版部）は幕末から明治・大正にかけて泊園書院を主宰した漢学者藤澤南岳に関する最新の論集で、9篇の論考を取める。

近代に関するものとしては、森田康夫『太虚と公正無私の思想 近代を拓く大塩思想』（和泉書院）が大塩平八郎の陽明学とともに、三宅雪嶺・中江兆民ら近代におけるその影響についても論じている。

朝鮮に関しては、木村拓『朝鮮王朝の侯国的立場と外交』（汲古書院）が、朝鮮王朝の明清・日本・琉球との外交関係の論理とその変化について考察する。このような史的考察は朝鮮儒教の背景を理解するのに役だつてであろう。

井上厚史『愛民の朝鮮儒教』（ぺりかん社）は「愛民」思想を軸に、井上哲次郎ら日本の従来への解釈を超えて朝鮮儒教の意義を再評価する意欲作である。宮嶋博史・井上厚史らの編纂になる『原典朝鮮近代思想史』の「伝統思想と近代の黎明 朝鮮王朝」（岩波書店）も刊行された。同シリーズ全6巻のうちの第1巻で、鄭道伝・李退溪・李栗谷・宋時烈の伝統儒教、丁若鏞・朴趾源らの実学思想のほか、民乱、東学など近代思想の主要文献を邦訳し、理解と研究のための基本資料を提供している。

このほか権純哲編『完本 高橋亨 京城帝国大学講義ノート』全2巻（三人社）も刊行された。戦前、ソウルの京城帝国大学教授だった高橋亨の講義ノート60冊を整理、翻刻したもので、第1巻が「朝鮮儒学史編」、第2巻が「朝鮮思想史編」となっている。高橋亨については近年再評価の兆しがあり、その講義がこうしてまとめられたことには大きな意義があらう。（吾妻重二）

●文 学

2021年1月～12月の文学の項は九州大学所属スタッフが担当した。すなわち比較社会文化研究院教授の東英寿、言語文化研究院教授の中里見敬、同教授の秋吉收、人文科学研究院講師の井口千雪、同特任講師の孫琳浄、同助教の岩崎華奈子、同学術研究員の稲森雅子、そして全体の取りまとめを人文科学研究院教授の静永健が行った。

例年通り当該期間の単行本を中心に報告するが、紙幅の都合上、言及できなかった書籍も多い。また近年、各出版社からの冊子体新刊案内が廃され、ホームページ等の電子情報に移行しつつある。我々も極力それらを参照したが、探し当たらなかつたものもある。あらかじめ読者の寛恕を乞う。

一、総記

『石川忠久先生星寿記念論文集：菊を採る東籬の下』（汲古書院）は、門下30名によ